



平成 18 年 10 月 17 日

各 位

会 社 名 宝ホールディングス株式会社
代 表 者 名 取締役社長 大宮 久
(コード番号 2531 東証、大証 第1部)
問 合 せ 先 取締役 IR 室長 松崎 修一郎
T E L (0 7 5) 2 4 1 - 5 1 2 4

当社子会社(タカラバイオ株式会社)の業績予想の修正に関するお知らせ

当社子会社であるタカラバイオ株式会社(コード番号 4974 東証マザーズ)が、平成 18 年 5 月 15 日に公表いたしました平成 19 年 3 月期(平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日)の中間期業績予想を、添付資料のとおり修正いたしましたのでお知らせいたします。

なお、当社の中間期連結業績についても現在集計作業中であり、内容を精査したうえ業績予想を修正する必要があると判明した場合には、速やかに開示いたします。また通期連結業績予想につきましては、中間期の決算発表時(平成 18 年 11 月 14 日予定)に公表する予定であります。

(添付) タカラバイオ株式会社の開示資料

以 上

当資料取り扱い上の注意点

当資料中の当社の現在の計画、見通し、戦略、確信などのうち、歴史的事実でないものは、将来の業績に関する見通しであり、これらは現時点において入手可能な情報から得られた当社経営陣の判断に基づくものですが、重大なリスクや不確実性を含んでいる情報から得られた多くの仮定および考えに基づきなされたものであります。実際の業績は、さまざまな要素によりこれら予測とは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素には、経済情勢、特に消費動向、為替レートの変動、法律・行政制度の変化、競合会社の価格・製品戦略による圧力、当社の既存製品および新製品の販売力の低下、生産中断、当社の知的所有権に対する侵害、急速な技術革新、重大な訴訟における不利な判決等がありますが、業績に影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。



平成 18 年 10 月 17 日

各 位

会社名	タカラバイオ株式会社 (コード番号 4974 東証マザーズ)
本社所在地	滋賀県大津市瀬田三丁目 4 番 1 号
代表者	代表取締役社長 加藤 郁之進
問合せ先	常務取締役 木村 睦
TEL	(077) 543-7212
URL	http://www.takara-bio.co.jp/
親会社等の名称	宝ホールディングス株式会社
代表者	代表取締役社長 大宮 久 (コード番号 2531 東証、大証第 1 部)

業績予想の修正に関するお知らせ

最近の業績の動向等を踏まえ、平成 18 年 9 月中間期（平成 18 年 4 月 1 日～平成 18 年 9 月 30 日）の連結及び単体業績予想（平成 18 年 5 月 15 日公表）を下記のとおり修正いたしましたのでお知らせいたします。

なお、平成 19 年 3 月期の連結及び単体業績予想につきましては現在精査中であり、平成 18 年 11 月 14 日に予定しております中間期の決算発表において公表する予定であります。

記

1. 平成 18 年 9 月中間期 業績予想数値の修正（平成 18 年 4 月 1 日～平成 18 年 9 月 30 日）

(1) 連結 (百万円未満切捨)

	売上高	経常利益	当期純利益
	百万円	百万円	百万円
前回発表予想(A)	9,448	△ 850	△ 876
今回修正予想(B)	9,780	△ 680	△ 320
増減額(B-A)	332	170	556
増減率(%)	3.5	—	—
前期実績(平成 17 年 9 月期)	6,465	△ 845	△ 862

(2) 単体 (百万円未満切捨)

	売上高	経常利益	当期純利益
	百万円	百万円	百万円
前回発表予想(A)	6,753	△ 518	△ 541
今回修正予想(B)	6,893	△ 304	△ 69
増減額(B-A)	140	214	472
増減率(%)	2.1	—	—
前期実績(平成 17 年 9 月期)	5,953	△ 791	△ 901

(注) 業績予想につきましては、当社グループが現時点で入手可能な情報に基づき当社グループが判断したものであります。従いまして、平成 18 年 11 月 14 日発表予定の業績は、これらの数値と異なる場合があります。

2. 修正の理由

【連結業績】

当中間期の売上高は9,780百万円と計画比332百万円(+3.5%)、前期比3,315百万円(+51.3%)の増収となりました。事業分野別売上高は、全ての事業分野で計画及び前期実績を上回りました。

利益面では、売上総利益が前期比1,633百万円(+58.9%)の増益となりましたが、計画比では324百万円(△6.9%)の未達となりました。売上高が計画を上回ったにもかかわらず売上総利益が計画比未達となったのは、売上を構成する品目(研究用試薬、理化学機器等)間の粗利益率の違いによるものであります。販売費及び一般管理費は、効果・効率的な費用投下とコストカットに努めました結果、計画比368百万円の減少(前期比ではクロンテック社連結等により1,435百万円の増加)となりました。営業外収益では受取利息の増加に加えて計画外の受託研究補助金等が発生し、営業外費用も計画比で減少しましたので、経常利益は680百万円の損失と計画比170百万円の増益(前期比164百万円の増益)となりました。

特別増益では、投資有価証券評価損失等の特別損失92百万円が発生したものの、特別利益として投資有価証券売却益等343百万円を計上した結果、当期純利益は320百万円の損失と計画に対し556百万円の増益(前期比542百万円の増益)となりました。

【単体業績】

当中間期の売上高は6,893百万円と計画比139百万円(+2.1%)、前期比939百万円(+15.8%)の増収となりました。利益面では、売上総利益が前期比374百万円(+15.8%)の増益となりましたが、計画比では197百万円(△6.7%)の未達となりました。販売費及び一般管理費は、効果・効率的な費用投下とコストカットに努めました結果、計画比357百万円の減少(前期比94百万円の減少)となりました。営業外損益は計画比・前期比とも改善いたしましたので、経常利益は304百万円の損失と計画比213百万円の増益(前期比486百万円の増益)となりました。

特別増益では、投資有価証券評価損失78百万円等が発生したものの、投資有価証券売却益258百万円等を計上した結果、当期純利益は69百万円の損失と計画に対し471百万円の増益(前期比832百万円の増益)となりました。

以上のことから、中間期の売上高・利益予想を上方修正するものであります。

以 上

当資料取り扱い上の注意点

当資料中の当社の現在の計画、見通し、戦略、確信などのうち、歴史的事実でないものは、将来の業績に関する見通しであり、これらは現時点において入手可能な情報から得られた当社経営陣の判断に基づくものですが、重大なリスクや不確実性を含んでいる情報から得られた多くの仮定および考えに基づきなされたものであります。実際の業績は、さまざまな要素によりこれら予測とは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素には、経済情勢、特に消費動向、為替レートの変動、法律・行政制度の変化、競合会社の価格・製品戦略による圧力、当社の既存製品および新製品の販売力の低下、生産中断、当社の知的所有権に対する侵害、急速な技術革新、重大な訴訟における不利な判決等がありますが、業績に影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。